

# ワヤン(ジャワの影絵芝居)と派生劇[前編]

Wayang, Javanese Shadow Play and its Derivatives [Part 1 of 2]

井口正俊

## 1. ワヤン・クリット初見

年配の読者諸兄には、子供の頃、両手指で犬や鷹の形をつくって、障子に投ぜられた影を廊下で眺める遊びを懐かしまれる方もおられましょう。影絵は十返舎一九作、喜多川月麿画『於都里伎』にもあって、昔から日本でも親しまれていました。たかが影絵、されど影絵、これを芝居に応用した例はシナなどにも存在したようですが、祭のイベントとして今日に至るまで人々に愛し続けられている国はジャワを措いて外にありますまい。ジャワのワヤンがユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作(2003)」に選ばれた所以も那邊にありますまい。

筆者が初めてワヤンを観る機会を得たのは30年前のことで、場所はジョクジャカルタ王宮近くのソノブドヨ博物館附設シアター、そこでは観光客用に短編の上演が毎晩行われていました。ジャワ独特のペンドボ様式と呼ばれる二重屋根を持つ建物の木戸を入ると、そこは15メートル四方ほどの大広間、中央後方の仕切壁の真中に幅5メートル、高さ1.5メートルほどの白布のスクリーンが張られ、脇に夥しい数の人形が立て掛けられていました。人形と申せどワヤン・クリット(Wayang=影、Kulit=皮、革)の名が表すように、水牛の鞣革を切抜いて彩色の施された平面的なもの、キャラクターの形状はといえば著しくデフォルメされています。人形には把手となる一本の軸が付けられ、左右の肩と肘は関節になっていて、手先に付けた細いロッドで動かせるようになっています。スクリーン中央上方には投射用のライトが一つ下がっています。手前がジャワ伝統のオーケストラ、ガムランの舞台で、様々の楽器が配置されています。打楽器が主で、吊下った大小のゴング、大きな鍵盤を供えたシロフォンのようなもの(ガンバン)、お椀を伏せて並べたようなもの(ボナン、クノン)は全て青銅製、他に鼓に似たドラム(クンダン)がありました。管楽器や弦楽器は少数で、二三の竹製の縦笛(スリン)や小さな胡弓に似たもの(レバブ)がありました。舞台手前の観客席に着いて英文パンフレットを見ると当日の演目は普く親しまれているラーマヤナの抜粋、次の意が書かれていました。

「アヨジャ国の王子ラーマが弓道大会で優勝して獲得した妻のシンタ姫が、森で金色の小鹿に化けた魔王ラワナの侍女に惹かれ、それを追っている隙に、僧侶

に扮したラワナに誘拐された。シンタ捜索に向ったラーマと弟のラクスマナは白猿ハヌマンに遭い、猿王スギリワの味方を得る。スンパティ(鳥、太陽神アルナの馭者)が得た手掛りにより、ハヌマンが海を隔てたランカ島に飛んで、ラワナに囚われたシンタを発見する。ラーマらは猿軍が海峡に造った土手道を渡って悪魔軍を攻撃、遂にはラーマがラワナを射止めてシンタを救出する。」



ジョクジャカルタ・ソノブドヨ博物館におけるワヤン・クリット上演風景。2008年6月、筆者撮影。

やがて、茶、黒、白で染上げたバティックのサルン(腰巻)を纏い、同じ布のジャワ帽を冠った楽手が音合せを始め、藍染のバティックで身を包んだ4-5人の女性のヴォーカルが着席しました。正8時、部屋の照明が落とされると、ガムランの演奏が始まり、スクリーン手前中央に座った矢張りサルンとジャワ帽姿のダラン(人形師)が、人形の中から聖なる山、グヌン・スメル(Gunung Semeru、須弥山または妙高山に相当)をモチーフしたグヌンガン(Gunungan)、或いは其処に描かれた「生命の木」に因んでカヨン(Kayon)とも呼ばれる1本をスクリーン中央に立て掛けて恭しく口上を述べ、緩々と物語を詠み始めました。ダランは、人形を次々と選び出して両手で巧みに操りながらスクリーンに影を投げ、それぞれのキャラクターの台詞をも声色を変えて話します。ひとりがナレーションと台詞の全てを受持つのは浄瑠璃の義太夫と同じ、その低い声は韻を踏んでいるように聞こえました。これがカカウインと呼ばれる詩文であることは後に知りました。節(せつ)の合間には女性ヴォーカルの甲高くも緩やかな詠唱が聞かれました。

影絵を鑑賞すべき場所である仕切壁の裏側に回ってみると、僅か布一枚隔てただけなのに、そこは幻想的な別世界、薄暗い中、そこだけ明るい矩形のスクリー

ンに、人形の影が切抜かれた輪郭そのままに、そこに穿たれた無数の孔までもがくっきりと写っていました。鞣革には幾分透明性があって、透けて写った影には、人形に塗られた色彩が淡く見えました。影の動きといえば、人物が向き合って問答する場面では手先を微妙に前後左右させるのみ、然るに一転してバトルの場面ともなると、2体の影は両腕両手を躍動させつつスクリーン全面を縦横に駆巡ります。そんな場面では、ダランが人形とスクリーンの距離を微妙に変えているのでしょう、影の輪郭が少し暈やけたりもして画面に変化を与えます。言語は地の文も台詞もジャワ語ですから、声色とトーンを聴くばかりでありましたが、ふと日本の浄瑠璃とて近世語と話の筋に親しみがなければ真面には聞き取れぬ理と悟りました。

1時間半ほどの上演は夢のように過ぎました。精緻ではあるがグロテスクにすら見えた革製の物体から、如何して生命感溢れる幻影が生れるのか、鞣革の人形も、ダランの技も、そして台本もバックミュージックのガムランも、長い年月を費して洗練されたものに相違ないと好奇心が募りました。

## 2. ソロ王家主催のワヤン・クリット

王家主催の影絵劇は滅多に見られませんが、筆者には幸運にも、ジョクジャカルタの東北東50キロ、ジャワ王家本家の都ソロで、それに接する機会がありました。郊外のジャワ原人発掘サイトを訪ねるのが目的でしたが、折しもその日はインドネシア国内各地のスルタン一行が参集して開催された第5回ヌサンタラ王宮フェスティバルの前日に当たりました。

前夜祭のイベントとしてワヤン・クリットが行われた市役所前のアルンアルン(都心広場)には、仮設とはいえ立派な屋根のある舞台が設けられ、手前には大規模なガムラン楽団、後方には巨大なスクリーンが見えました。演目はマハーバーラタの終章に倣ってジャワで書かれた「バーラタユッダー」、同じ祖父から分れたパンダワ家とコラワ家の悲劇的かつ壮絶な戦争の物語でありました。

人形の動きは、ジョクジャカルタで観たものより幾分緩やかで優美に見えましたが、事実、後で読んだ本にも、両者には若干の差異があって、ジョクジャカルタ流の方が保守的で純朴、ソロでは時代とともに洗練されたとありました。

観劇中、筆者は言葉が分からないので、物語の中の情景を臆気に想像するばかりでしたが、会場を一杯に埋め尽くした群集は、嬉々とした表情で目を輝かせて舞台を見詰め、ダランの声に聞入っています。スクリーンの裏側も人々で溢れていました。この情景を見て、ジャワの人々の心に、今は本物の上演を見る機会の少ないワヤンが、強く根付いていることを悟りました。

事実、ジャワでは、インテリア、アクセサリからTシャツの図柄に至るまでワヤン人形がふんだんに使われ、ワヤン劇はテレビでも頻繁に放映されています。ワヤン人形も街中で売られていますが、手頃な値段のものはボール紙製の模造品ですから、お土産としては結構でも影絵には使えない代物です。

この夜のような正式のワヤンの上演は夜を徹して未明まで続くのだそうですが、日付の替る頃にその場を辞しました。



第4回ヌサンタラ王宮フェスティバル前夜祭、ソロ市役所前広場におけるワヤン・クリット「バーラタユッダー」上演風景(上)および一場面(下)。2006年9月、筆者撮影。

## 3. ワヤンの発祥と進化

ワヤンの題材となったバーラタユッダーやラーマヤナはインドのテキストの直訳でなく、カカウイン(Kakawin)という厳密な韻律を踏むジャワ語の叙事詩であって、その嚆矢は8-10世紀に中部ジャワ・マタラムの地に栄えたサンジャヤ朝の後期、バリトゥン王の御代(西暦898-910)に書かれたジャワ版のラーマヤナであるとされています。ジャワの都は程なくしてマタラムの地を離れて東ジャワに移ることになるわけですが、この詩文形式は11世紀以降、「アルジュナウイワハ」、「クリシュナヤナ」、「ポーマンタカ」などの文学作品のみならず、「デサワルナーナ(別名ナーガラクルターガマ)」、「パララトン」のような史記にも用いられました。

ワヤンは歴史的に何時の時代に始まったか。今に残る最も古い記録はバリトゥン王が西暦907年に銅版に刻んだ勅許にあって、そこには、ある僧院へ領地が

献ぜられたのを祝う儀式が行われたとき、余興として、ラーマーヤナの朗誦、マハーバーラタの中のビマの話に因む舞踊などとともに、同じビマの話を演目とする「ワヤン」の上演が行われたことが記されていました。このワヤンが果してワヤン・クリットであったか、別の形態のショーであったかは、この記録からだけでは判然としませんが、恐らくワヤン・クリットであったと考えられます。例えば、1035年に書かれた「アルジュナウイワハ」には「彼ら(観衆)は、それが単に切り抜かれた皮革[の影]が動き、話していることを知りつつ、泣き悲しんでいる。」の行があります。また、11-12世紀の作と目されるカカウイン「ポーモンタカ」には、「彼らは雲の中に隠れ、次に白いスクリーンに映るワヤン人形のように再び現れた。」「水田はワヤンのスクリーンの背後に隠されたように[霧で]覆われ、バナナの木はワヤン人形のように揺れていた。」などの行があって、遅くともこの頃には確実にワヤン・クリットが行われていたと見られます。

人形の影を映すというアイデアは如何にして生まれたか。一つの学説は、「古代のジャワの人々は、先祖の靈魂が影の中で蘇り、彼らに助言や魔力を与えてくれると信じた、そんな中で影絵が生まれたのであろう。」と説いています。

ワヤン・クリットの確立には、15世紀以降、ジャワにイスラム教を広めたイスラム教徒が与ったという説がイスラム信奉者によって唱えられました。中には、ワヤン・クリット自体がイスラム聖職者によって創造されたという突飛な説まであったようですが、一部のイスラム教徒の間では、西暦1世紀にインドから渡来してジャワに文明を齎したアジ・サカが、実は予言者ムハンマドが東征途上インドに来たときの仲間であって、マハーバーラタ、ラーマーヤナ、アルジュナウイワハなどはイスラム教徒であったアジ・サカの著作であると信じられていたそうですから、「ワヤン・クリットのイスラム起源説」などは驚くに値しないかも知れません。

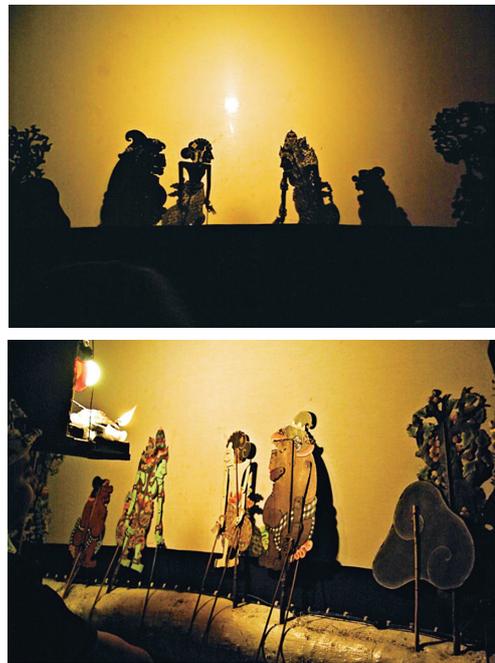
現在に続くワヤン・クリット人形のデフォルメされた非現実的な姿は、ジャワ最初のイスラム王国ドゥマックを1475年前後に建国したラデン・パターと同時代のイスラム教聖者スナン・ギリが、イスラム教の偶像崇拜禁止の教えに触れるのを避けるために考案したと言われています。この説の真偽はともあれ、イスラムの侵入を免れたバリのワヤン人形のデザインが、より自然に近い姿であるというのは興味あるところで、ジャワにおいても原型は左様なものであったかという見方があります。

百聞は一見に如かず、バリで観劇したワヤンは大変に興味あるものでした。場所はバリ芸術の里ウブドの街中のポンドク・バンブーという名の小さな小屋、軒先で入場券とともに受取った1枚紙のプリントには、



ジャワとバリのワヤン人形の比較。

上：アルジュナ。左：ジャワ(ジョクジャカルタ)、右：バリ。下：カヨン(グヌンガン)。左：ジャワ(ソロ)、右：バリ。複写元：<http://tokohwayangpurwa.blogspot>。



バリ・ワヤン・クリットの一情景。(上)影絵側、(下)パベット操作側。当然ながらパベットの配置が左右対称であることに注意。バリ島ウブド、ポンドク・バンブーにて、2012年2月、筆者撮影。

「ワヤン・クリットには教導、娯楽、宗教の意味あり、ヒンズー教が盛んなバリでは寺院の祭祀、結婚式、誕生祝、葬式などの際に一般に行われている。」といった案内に続いて、当日の公演の解説がありました。演目は「マハーバーラタ物語」とあって、次のような要旨が英語で書かれていました。

「バンダワの王が新宮殿落成の式典について周囲の王国の支持を得るべく派遣したクリシュナ、ビマ、アルジュナの3人がマガダ王国に着くと、そこではジャラ・サンダ王が毎日のように人身御供の儀式を行って

いた。3人は托鉢僧に扮して王宮に入り、シヴァの教えに背く斯様な儀式を止めるように説いたが、ジャラサンダが激昂、戦が不可避となったので、彼らは衣を脱いだ。激しいバトルの末、パンダワの3人はジャラサンダを成敗した。」

ジャワのワヤン・クリットとの違いは人形の容貌やグヌガン(カヨン)の形状に留まりませんでした。パペットもスクリーンもジャワのものより幾分小さ目、パペットの動きは荒々しく且つダイナミックで、スクリーンに映る影は灰かに揺らぎ、ガムランの音は甲高く聞えました。裏手に回ってみると、ダランが独りで地の文と台詞を語る様はジャワと同じでしたが、パペットは彼が1個ずつ選び上げるのではなく、両脇に座る2人の助手によって次々と手渡されていました。投射用の光源は電球が補助的に付いてはいるものの、ココナツ油の灯火でした。ガムランといえば、ガンバン(大型青銅シロフォン)2台を奏でる楽手2名のみで、ヴォーカルもなく、ジャワのフルオーケストラとは掛け離れたシンプルなもの、これらの様子は古くに描かれたスケッチで見たものと基本的に同じでした。公演は観光客相手のものでありましたから、ダランは台詞の中に態とらしいバリ訛の英語でアドリブを挿んだりもして、ショーは砕けた雰囲気の中で進行、1時間で終了しました。

兎もあれジャワのワヤン・クリットが現在のかたちに近いのはマジヤパヒト王国崩壊後に小王国の分立していたジャワをパネムバハン・スノパティが統一して新マタラム王国を確立した17世紀前半以降のことで、パペットの腕が可動式になったのもその時期とされています。新マタラム王国は18世紀半ばの1755年にソロのスフナン家とジョクジャカルタのスルタン家に二分されましたが、ワヤン・クリットは両家において生まれ、今日のような高貴な芸術になりました。マタラム王国の分割は18世紀前半に起きた3度に互る王位継承戦争の果てに、VOC(オランダ東インド会社)の調停によって行われたもので、以降オランダのジャワにおける権勢が拡大したというのが歴史の一面

ですが、他面、治世が安定して王侯も貴族も軍事に関する必要がなくなったことも事実であって、彼らは後顧の憂いなく芸術文化に意を注ぐことができるようになりました。後述するワヤン・ウォング(人間の演ずるワヤンの意)が大成されたのも、ソロおよびジョクジャカルタの宮廷においてでありました。王室とその藩屏たる貴族は国が共和国として独立して以降も存続し、民の敬愛を集めています。

後編(2016年11月号)では、ワヤン・クリットからの派生劇を含む「ワヤン・ワールド」についてお話しします。

## 附記

本稿は「読物」でありますから註釈は省きました。以下の拙著を参照されることを欲します。

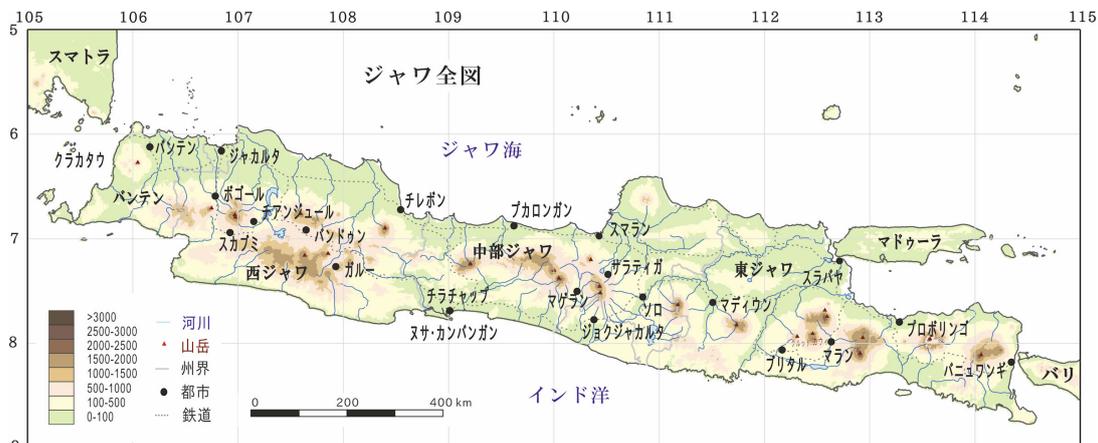
- 1) 井口正俊著「ジャワ探究：南の国の歴史と文化」、丸善プラネット刊(1913)。
- 2) Masatoshi Iguchi, Java Essay - The History and Culture of a Southern Country, Troubador Publishing, UK. (1915) ePub版：Amazon.com。
- 3) 徳川義親『じゃがたら紀行』英訳版：Marquis Tokugawa (Translated by M. Iguchi), Journeys to Java, ITB Press (2004) /html版：www.maiguch.sakura.ne.jp。

1,2序章の「ジャワ史沿革」は下記URLにも収録。www.maiguch.sakura.ne.jp/。

原写真の多くはカラーであって、会員用ウェブページで見られる。



MASATOSHI IGUCHI  
無職(元・旧通商産業省工業技術院勤務)  
工学博士(繊維工学、東京工業大学/1966.3.26.)。東京都在住。  
E-mail: maiguch@gmail.com  
(略歴) 嘗ては高分子の研究に従事、公職を離れて後は専らジャワの歴史と文化の勉強に勤む。以前は囲碁を嗜んだ(六段/1990)。



地形図は DIVA-GIS Country level data (Indonesia) に基づいて作成 (August 2016)。

## ワヤン(ジャワの影絵芝居)と派生劇[後編]

Wayang, Javanese Shadow Play and Its Derivatives [Part 2 of 2]

井口正俊

### 4. ワヤン・ワールド

#### (1) ワヤンレパートリーの拡大

承前(2016年10月号)。本来「影」を意味するワヤンの語は影絵以外の芝居にも適用されて、所謂「ワヤン・ワールド」を形成しています。

ワヤン・クリットそのものに関しても、バーラタユッターやラーマヤナを扱うワヤン・プルワ(Wayang Purwa、オリジナルワヤンの意)のほかに、15-16世紀の東ジャワでは「パンジ物語」や「ダマルウラン伝説」を題材とするワヤン・グドッグ(Wayang Gedog)が生まれ、新マタラムの宮廷では、過去の王国、取分けケディリーシンガサーリ時代の逸話に基づくワヤン・マジャ(Wayang Madya)という新しいレパートリーが加えられました。また、ジョクジャカルタおよびソロでは、それぞれの史話に因むワヤン・クルク(Wayang Kuluk)、ワヤン・ドゥパラ(Wayang Dupara)が生まれ、ほかにジャワ戦争(ディポネゴロ王子の乱、1825-30)を題材とするワヤン・ジャワなども作られたといえます。カトリックの教育のためのワヤン・ワヒュー(Wayang Wahyu、黙示ワヤンの意)、はたまた1949年のインドネシア独立後には共和国憲章普及のためのワヤン・パンチャシラも生まれました。



左：ワヤン・ワヒュー(セント・ポール物語)の一場面。ソロ・ガジャブ・ワヤン・ワヒュー教会主催、イースター上演(31/03/2012)。複写元：[www.hidupkatolik.com/2012/04/18/solo-jawa-tengah-wayang-wahyu-paulus](http://www.hidupkatolik.com/2012/04/18/solo-jawa-tengah-wayang-wahyu-paulus)  
右：パベット(イエス・キリスト実物)。ソロ市内スラカルタ・パングディ・ルフル小学校所有。同校を訪問した2012年2月、校長先生の御高配を得て筆者撮影。

「鼠と小鹿」などの御伽噺をワヤンにしたものもあつたようで、筆者は徳川美術館の「義親東南亞細亞コレクション(未公開)」の中に数点の動物を模したパベットを見たことがあります。

さはあれど、今日上演されるのはワヤン・プルワのみ、ジャワの人々はワヤン・プルワをこよなく愛して

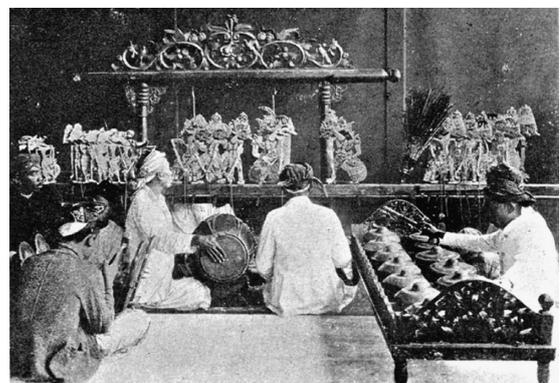
います。

#### (2) ワヤン・クリティック

人形を操るものの一つに木板製の人形を扱うワヤン・クリティック(Wayang Kelitik)またはワヤン・クルチル(Wayang Kerucil)と呼ばれるものがありました。人形の容姿はワヤン・クリットに似て、革製の可動式の腕が付けられています。本体を軸で支え、細いロッドで上腕下腕を動かす要領もワヤン・クリットと同じですが、影ではなく人形そのものを見せるものであって、本体の表裏には、繊細な彫刻と着色が施されています。ワヤン・クリティックは、マジャパヒト時代(1293-1520)に始まったと考えられていて、往時、東ジャワで盛んであったそうですが、今は全く廃れています。インターネット上の記事のほか成書にも、ワヤン・クリティックもまた影絵芝居であったとの記述が見られますが、それは間違いでありましょう。筆者は徳川美術館において義親公が1920年代に蒐集された人形のセットとともに、公自らが撮影された実演の16ミリフィルムを拝見したことがあります。そこに写っていたのは影絵芝居ではありませんでした。静止画は「じゃがたら紀行」にも載せられています。



ワヤン・クリティックの人形。徳川美術館「義親東南亞細亞コレクション」の一部。徳川美術館の好意による。



ワヤン・クリティック実演風景(影絵でないことに注意)。徳川義親公ジャワ行の1920年代には上演されていたものと推定される。尾張徳川家の許可を得て、徳川義親「じゃがたら紀行」、郷土研究社1931より複写。

### (3) ワヤン・ゴレック

人形芝居のもう一つに、立体的な木偶を操るワヤン・ゴレック(Wayang Golek)というものがあります。木偶の構造は比較的簡単で、円筒状の胴を貫く孔に軸が通されて軸の上部に取り付けられた頭を動かせるようになっている、胴には肩の部分から腕が下り、手首にはワヤン・クリットと同様にロッドが付いているといった具合のもの、上半身、下半身にはバティック布のクバヤ(上着)とサルン(腰巻)が着せられています。ワヤン・ゴレックの起源は定かではありませんが、原型はイスラム化されたジャワ北岸の都市に17世紀にシナから伝来し、メナック物語、即ちムハンマドの伯父または叔父アミル・ハムザー(ジャワ名:アグン・メナック)に纏わる話を演題として広まったとされています。その後、ラーマヤナなどの古典も演ぜられるようになって、特に西ジャワで盛んになったそうです。ワヤン・ゴレックの木偶もデパートなどでお土産用に沢山売られていますが、今時一般のために上演されることはなく、筆者は以前にバンドンのホテルで、15分ばかりの観光客用のデモンストレーションを瞥見したことがあるに過ぎません。



ワヤン・ゴレックの木偶(徳川美術館「義親東南亜細亞コレクション」の一部)。高級品。衣装の図柄と色(右側木偶のサルンの色、黒、茶、白)からジョクジャカルタのものと判断される。徳川美術館の好意による。

### (4) ワヤン・ベベール

絵巻物を垂直に立てた支柱の間に展げ、スクロールしながら、ダランが物語を詠ずる「ワヤン・ベベール」というものもありました。起源はワヤン・クリットより古く4-5世紀に遡るとい説もあるようですが、確実なのは、マハーバーラタ、ラーマヤナ、パンジ物語などが採用された11-12世紀以降でありましょう。ワヤン・ベベールは、明の鄭和の<sup>みんな</sup>大航海に随行した馬歡が著した「瀛涯勝覧(1416)」にも記されていますから、マジヤパヒト朝の時代には普通に行われていたと思われるのですが、その後衰退して、今は写真や書物で上演の模様を偲ぶことができるに過ぎません。

巻物の材料には、伝統的にダルアンという名の、梶

の木(*Broussonetia papyrifera*)の外樹皮を除いた白い内樹皮を丹念に叩いて展ばして作った樹皮紙が用いられました。ダルアンは文書にも用いられましたが、次項に述べるロンタルほど一般的でなかったようです。ダルアンもロンタルも、パルプ紙の伝来普及とともに廃れました。但し伝統保存を志す好事家はおられるようです。



ワヤン・ベベール実演風景。W. F. Stutterheim, Pictorial History of Civilization in Java. Translated by Mrs. A. C. Winter Keen, Java Institute and G. Kolff, 1927より転載。

### (5) ロンタル絵草子

ワヤンの範疇に含めるよりも、絵草子というほうが適切かも知れませんが、古くには文言だけでなく絵を刻んだロンタル文書があったそうで、稀に博物館で見かけます。ロンタル文書は、ロンタル椰子(*Borassus flabellifer*)の葉を、防腐剤としてターメリックを加えた水で煮て乾燥、短冊型に切って、その表面に鉄筆で文字や絵を刻んで煤と油を混ぜたコンパウンドで埋めたもので、簾状に連ねられます。バリでは現在に至るまで作られているそうで、筆者がデンパサールの市中で入手したお土産用のものは恐らく20世紀前半のアンティーク、僅か8葉のロンタルで構成され、それぞれの中央部にラーマヤナの代表的情景が刻まれ、左側に筆者には解読不能のバリ文字の解説が、右側にその英訳が付けられていました。



「カカウイン・ボーマカウヤ」のロンタル文書(インドネシア国立博物館蔵)。The Lontar Foundation (Jakarta) 提供の画像の一部分(4葉右半分)。左側も同形。中央および左右の孔に紐を通して簾状に綴じる。

長編カカウインを刻した草子の完全版ともなると何百葉ものロンタルが必要でしょう。インドネシア国立博物館所蔵のカカウイン・ボーマカウヤ(ボーマンタカの異名)のロンタル文書はその一例で、一枚毎に繊細な文字や絵を刻んだ先人の技量と忍耐が如何許りの

ものであったか、想像を絶します。

因みにロンタル椰子の木はシワランとも云い、若い実の核は食感が荔枝に似て、美味しく食べられます。

### (6) 舞台劇ワヤン・ウォング

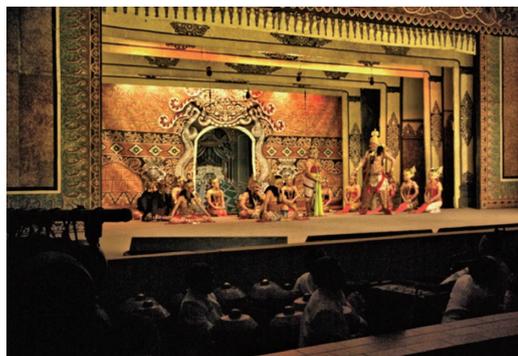
先に触れたように、男女俳優が演ずるワヤン・ウォング(別称ワヤン・オラン、ともに人間ワヤンの意)は、18世紀以降、ソロのススフナン家とジョクジャカルタのスルタン家で誕生しました。台本が叙事詩カカウインであって、ガムランが伴奏することもワヤン・クリットと同じですが、ダランが詠むのは地の文だけであって、台詞は俳優が話します。

往時は国内各地にあったと聞く劇場は映画やテレビが普及するに連れて殆ど廃れました。今日、ジョクジャカルタ郊外のプランバナンと市内の野外劇場で上演を観ることができますが、観客の大半は観光客でありますから、演目は彼らに親しみのあるラーマヤナに限られ、興行自体を「ラーマヤナ・バレー」と謳っています。

本格的なワヤン・ウォングの常設館はソロ市内スリウェダリ恩賜公園内に残されている由、そこを訪ねたときのことを記しましょう。平屋建劇場入口前の床には「今日はチトラワンギ」、「明日はトゥンジュンサリ」と演目を書いた2枚の立看板が、壁には月間プログラムを貼った掲示板がありました。中に入ると舞台前面に中央に大きなグヌンガン(染めた幕)が下がり、上部にはカーラの面(闖入者を見張る鬼面)を織込んだ緞帳がありました。ガムランのフロアは舞台の手前の低い位置に設けられています。観客の中には一見して外国人旅行者と判る者も散見されましたが、多くは土地の方のようで、週日ではありましたが、開演までに半分位の席が埋まりました。

ダランの口上に次いで幕が開くと、舞台奥には何処かの王宮を鮮やかに描いた幕が見え、豪華な衣装に身を包み、煌びやかなアクセサリを付けた武装姿の王子、王女、または貴族と思われる10名ほどの男女俳優が登場しました。彼らの舞は、ジョクジャカルタで見た「バレー」より緩やか且つ優雅に見え、声には気品があるように聞こえて、オーソドックスな舞台劇といった印象を受けました。言葉が解せないで想像を巡らすばかりでしたが、この場面は出陣式のように見えました。

第2幕は森の中、別のグループの女兵士とラーマヤナに登場するのに似た白いマスクを付けた猿軍団との会話で始まり、何かの相談をしている風でした。第3幕は森の少し開けたところで2人の男性兵士の剣闘、第4幕(終幕)では最初とは別の宮廷門外で、2人の女性兵士の決闘あり、第1のグループの女性が敗れましたが、その遺体を相手の女性兵士が抱いて嘆き悲しんでいるふうで、話の筋さえ分らぬままに1時間半の上



ソロのスリウェダリ劇場におけるワヤン・ウォング、「チトラワンギ」の第一幕。舞台手前がガムランのフロア。2009年5月、筆者撮影。

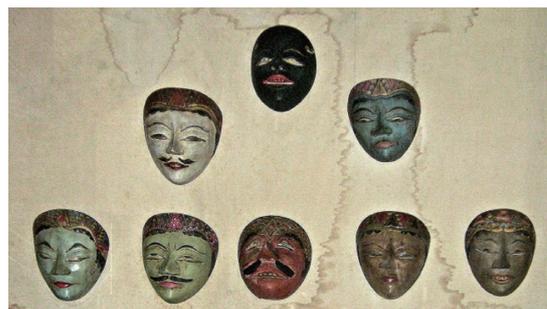
演が終わりました。

このチトラワンギの話が古典に基づくことは間違いありませんが、出典は不明です。因みに翌日のプログラムのトゥンジュンサリ(Tunjung Sari)は、シンガサーリ朝クルタネガラ王の時代の歴史に基づく話のようです。

次にソロを訪れたときに観た出し物は「バスデワ・カルマ(Basdewa Karma)」でありましたが、予めそれを知らずに出掛けたので物語の筋すらも追えなかったことは前回と同じでした。この話は、後に、マドゥーラのバスデワ王子がライバルと競って、遂には、プラブ・バドゥラウィナタの娘バドゥライ姫と結ばれる話と分りました。斯様に此処の演目はジャワの史話に通じた地元の人向けのものばかりのようです。ジャワ語の分らぬ外来客のために、一枚紙でよから粗筋を共通語であるインドネシア語、望むらくは英語で書いたパンフレットを劇場窓口に備えてくれればこそと願ったのは、筆者ばかりであります。

筆者が気付いたワヤン・ウォング劇の特徴の一つは日本の歌舞伎や西洋の舞台劇と異って、所謂大道具の類が全く使われないこと、それらは必要に応じて背景の幕に描かれていました。

人間の演ずる劇にワヤン・トペン(Wayang Topeng)という仮面劇があり、これはパンジ物語を主な演目として東ジャワで行われたといわれますから、歴史的にはワヤン・ウォングより古いといえましょう。ジャワでは廃れましたが、筆者は未だ観る機会を得ていないものの、バリではその伝統が受継がれているようです。



ワヤン・トペン用の仮面。バリ博物館(デンパサール)所蔵。2012年2月、許可を得て筆者撮影。

## (7) 宮廷の舞台劇

宮廷で執り行われるワヤン・ウォングに一般人が接することはできませんが、1929年のジャワ行中にジョクジャカルタとソロの両王宮に招かれられた徳川義親公は、「ジャがたら紀行」の中に、我々平民には窺い知れない宮廷内部での演劇の雰囲気を書き記されています。

「俳優は左右から二名宛登場しました。いづれも頭を垂れてひかへてゐます。この廣い殿中、寂として聲なく、嚴肅の氣が漲って、重く重い感じがします。この寂寞を破って、王様が、『始め』と一言命令されました。ダランは『應う』と答へて、徐ろに本を開き、朗々と讀誦を始めました。話はラマヤナの一節。つづいて音楽が始り、歌手は謡ひだしました。音楽は低調で、ハルモニーは金聲木聲錯雑し、渾然として、餘韻は翳々と聴くものを酔はせます。(ジョクジャカルタの項、原文のまま)」

「ガメランの調子が變ると、廊の彼方から絢爛たる服装の二人の青年が、静かに歩をすすめて登場しました。一人は廿一二歳、他は十七八歳でせうか、床上に相座して合掌、頭を垂れて暫く黙禱してゐます。やがて音楽につれて頭を上げ、徐ろに立って舞ひ始めました。頭には黄金の鳥兜、上半身は裸で、脊には胡蝶の翅に似た黄金の甲をつけ、腰の短劍にも無数の寶石が鑲めてあって、燈火に映じて燦然と照り榮えます。私が眞に驚いたのはその服飾の美でなくて、この二人の青年の如何にも氣品の美しい事でした。頬に淡く紅をさし、背に墨を入れてゐるので、その麗はしい貌を更に美しく引き立たせます。宮闕に侍する三千の華麗を、顔色なからしむる舞姫も月の前の星の如く、燦爛たる光輝に、忽ちその影をかくさなければなりません。私は徒に茫然と、まるで魂がふらふらと脱け出した人の様に、きつとつまらない貌をして見惚れてゐたのでせう、王子(隣席の御案内役)は私の肩をたたかれたので、はっと氣がつくと笑ひながら『あれは私の弟と子供』といはれました。只人でないとは思ってゐましたが、果然それは公子達なのでした。それにしても何といふ艶麗さでせう。二人の公子は鮮やかな舞ひ振りを見せられます。優雅に暢容に、そして戦の場となると急に激しく、體(たい)を交し身を翻し、短劍の刃と刃は火の出る程に打合され、凄愴な舞を演ぜられますが、其間にも優雅な趣は失はれません。やがて舞は高潮に達したところで終り、公子達は静かに一揖して引きさがられました。(ソロの項、原文のまま)」

宮廷芸術で最も崇高かつ神聖なものはスリンピとブドヨという厳に貴族の処女の女子によって演ぜられる二つの舞踊で、これらの演技は少なくとも近年までは宮廷内に限られ、過去には一般人が鑑賞することは叶いませんでした。筆者は一度だけジョクジャカルタのホテルのディナーショーでスリンピを観ましたが、踊

子2人による15分程度の極く略式のもの、記憶も薄れています。「ジャがたら紀行」にはジョクジャカルタ宮廷内でのスリンピとブドヨの演技の様子が記されています。

書物に「精神的文化的意義を内包するジャワの演劇に比較しうるものは日本の能楽しかない。」という指摘があります。室町初期の足利義満の時代に世阿弥元清(西暦1363-1443?)によって完成された能楽は、江戸期には武家の式楽として幕府および諸大名から保護を受けて、儀式の際に上演されました。筆者が取って付加えるならば、日本の朝廷で生まれた雅楽もその範疇に入ると言つて良いでしょう。



ソロ宮廷におけるワヤン・ウォング。徳川義親公が1929年に訪問の折にスプナン・パクブオノ10世から贈呈された一葉のコピー。尾張徳川家の好意による。

## 附記(再記)

本稿は「読物」でありますから註釈は省きました。以下の拙著を参照されることを欲します。

- 1) 井口正俊著「ジャワ探究：南の国の歴史と文化」、丸善プラネット刊(1913)。
- 2) Masatoshi Iguchi, Java Essay – The History and Culture of a Southern Country, Troubador Publishing, UK. (2015) ePub版：Amazon.com。
- 3) 徳川義親『ジャがたら紀行』英訳版：Marquis Tokugawa (Translated by M. Iguchi), Journeys to Java, ITB Press (2004) /html版：www.maiguch.sakura.ne.jp。  
1, 2序章の「ジャワ史沿革」は下記URLにも収録。www.maiguch.sakura.ne.jp/。



MASATOSHI IGUCHI  
無職(元・旧通商産業省工業技術院勤務)  
工学博士(繊維工学、東京工業大学/1966.3.26)東京都在住  
E-mail: maiguch@gmail.com  
(略歴)嘗ては高分子の研究に従事、公職を離れて後は専らジャワの歴史と文化の勉強に勤む。以前は囲碁を嗜んだ(六段/1990)。